

父、禄祐への記憶

糸魚川の旅に拾う

小野 ミヤ子

(会員・佐伯市向島二丁目)

糸魚川への旅

六月初旬、念願の糸魚川へ空路旅立った。

六月とはいえ、北陸地方では残雪が山々を覆い、南国育ちの私には異様な風景に見えた。夕闇に沈む日本海の風景や、元首相田中角栄氏の出身地のせいか整備された海岸線の道路が、田舎町を想像していた私には素晴らしき景観として目に写った。

翌日は相馬御風さんのお宅を訪ね、午後は糸魚川の歴史民俗資料館へ行き、明治・大正・昭和の三代にわたる文学者の作品を見学した。旅の車中で相馬御風の作『糸魚川より』(昭和十二年発行)を読みながらの旅だったが、五十年前のこの町はもっと違った町だっただろうと思っ

夕方、大糸線で長野へ、長野から身延線で日連宗総本山久遠寺へ行き、ここで一泊した。

次の日、寺の宝物館を見学。午後、藤田茂吉氏と関わりがあった曾宮一念氏を訪問した。

「先生。是非何か佐伯の思い出を書いて戴けませんかと、お願いした処、次のような『禄祐への記憶』を書いて送ってくれた。

曾宮一念に関する書物

火の山巡礼 大岡 信

画家は廃業 曾宮 一念

ニセ家常茶飯 同

雁わたる(へなぶり) 同

九十九の店じまい 同

禄祐への記憶 曾宮 一念

これまでに父、禄祐のことは書いているが、改めて書くことにする。佐伯に住む小野ミヤ子さんからの依頼に答える為で、私はこの秋九十九歳になるから最後の文に

なるかと思う。昨年出版された『画家は廃業』という私の話を文にしたものの中身と重複する所があるが、成可く父のことに絞るようにしたい。この文は私の記憶は五歳くらい明治三十一年頃麻布片町の家から始まる。その前には人形町、銀座近く、赤坂にいたらしいが、それは話を聞いたにすぎない。それは父母の話で私の記憶ではない。

麻布の家は、田村という大家の庭の中にあった。父母と母方の祖母たつと母の妹蝶で、父はどこかへ勤めていたらしい。



明治三十一年年末に京橋区に移転し、佐伯から父の母と妹太尾が上京し、父の母は全くの田舎の老婆であった。直見村の農家出であったろう。まもなく死んだ。太尾は山中譲三方に行儀見習に行った。この太尾は教養もありしかもふくぶくしい顔をした叔母で、山中家で令嬢の用を勤め、のち中村平吉に嫁した。

父は藤田茂吉と共に上京、報知新聞に入って、ここで幕府の外国奉行栗本鋤雲と知った。鋤雲書の『米華書屋』は大正震災で失った。父の勤め先は私の想像で記すばかりはない。

「報知」記者の次は「電報通信社」で友人の亀谷馨と共に経営した。社員の名簿が残っていたので父自ら社長となり、亀谷の他十人近くの名が列していた。当時としては通信社の走りであろう。しかし私が名簿を知った時は解散後であろう。今も同じような社があるのは名義を譲ったらしい。亀谷は後に私立名教中学を創立、自ら校長となった。麻布時代は電通解散後で父の困窮時と思われる。

下町暮らしは、通称霊岸島（島ではない）町名は京橋区長崎町で新川という酒倉町に近く、ここに六年住んだ。

鍛冶屋・銅壺屋・建具屋・漢方医等職人町であった。京華日報社は西銀座にあり、赤煉瓦でその幹部であった。貧乏記者だが抱えの人力車で通い、休日には車夫が私を乗せて遊んでいた。母は家の掃除と料理は好んでしたが、水汲みや洗濯等はないので女中を置き、その「すず」という女は父の死後までいてくれた。

ここで母について少し書かせてもらおう。わかには人形町中央の大観音角の八百屋の長女であった。八百屋の娘だがその父親が芸事が好きで、且つ娘の器量自慢に芳町で清元の師匠をさせていた。妹の蝶は踊りをやり、つまり芝居の衣装を付けた写真が残っている。ところが十六歳頃から脊椎カリエスを病み十九歳で死んだ。緑祐は大川端の長野家に下宿していた。芳町とは五十メートルくらいの所で、わかの子清元の家を知り、田舎出の緑祐は都会人になろうとし、わかにはインテリの緑祐に接近して所帯を持つに至ったと私は想像する。話はめでたしたが、父緑祐の負担は急増し、病人の蝶と母親のたつを引き取った。その上わかや蝶の病気で受け取る犠牲を払った。たつ婆さんにも病気があったが、私のお守り役をし、同じ寝床に休んだ。たつのしなびた乳房を吸ったのに案外

私はひどい感染がなく、上手く免疫を得たらしい。

わかには父に良く尽くした。西洋に適する家を探し、父の好む料理を研究し、申し分なかった。私に対しても病気の時は手当を自らやってくれた。しかし子供を産んだことがないから私は母と寝たこともなく、おぶってくれた覚えもない。友達の家へ赤児を見に行つてその母親の鞠のような乳房を吸うのを見て、私はこういう母を欲しくなった。とてもわかには望めない。これが母への一生の不満であった。

中学四年の七月下旬、父母と佐伯へ行った。私だけ一週間奈良で画を描き、ここで父母と遇つて大阪から別府丸に二泊し、三日目の十時頃佐伯に着くと、於菟彦、月本策弥が迎えてくれ、月本家に入った。前に濁った川のある室に、それから一カ月余りいたが、父母は七、八日いて帰京した。月本小策（二十歳）、策弥（十七歳）と、その母が居た。兄弟の姉は隣に嫁していた。於菟彦・策弥等と番匠川で泳いだり釣りをした。橋の辺りに水上自転車なるものがあつて私は乗つて遊んだ。橋の対岸へも写生に歩いたから曾宮の故郷直見にも行ったわけである。八月半ばに於菟彦・策弥等と釈間岳に夜行で登った。

ミキという青年が釈間岳の神主と知人で同行してくれた。神主の家での赤飯はうまかった。帰途は愛宕山を経て佐伯へ帰った。

於菟彦には妹正子、弟静逸があり、父正邦は東京の私の家に郡長会議で度々泊まっていた。夫人は月本家から嫁したと思われ、いかにもしとやかな人。山口家は曾宮家よりはるかに上の武士であったと聞く。私が画を好むと聞いて、正邦は梅や蘭の四君子を墨絵で描いた。この文人趣味が於菟彦にもあり、画は描かずに白秋に似た詩をつくった。正邦は禄祐の従兄弟で、書や文を習ったと聞いたが、その血縁は分からない。

禄祐の佐伯行は養賢寺で先祖の法要が目的で、夏草を刈って寺山の上の墓に参った。

於菟彦はその秋上京、早稲田予備校から農業大学に行った。私は彼を度々引き出し、青梅から武蔵御岳へ歩いた記憶がある。佐伯帰省後、禄祐のいた東京日々が大坂毎日の経営となり、総辞職した。その後、「やまと新聞」に入った。ここに転じた頃から多忙の為健康を損ない、二二三の地に静養したがおもしろからず、大森駅上の通称木原山の家に移った。大正二年の末で、庭に葉鶏頭が紅

色に残っていた。私がここで描いた画はこの葉鶏頭と冬の夕日が沈みかけると、急いで描いた落日であった。この二つの画は寝たままの禄祐に見せた最後の画となった。

大正二年十二月二十六日、佐伯から例年届いた鱈目刺を、父は知人へ送るのに宛名を書こうとしてその気力がなく、やがて苦しそうな発作が起きたので、私は坂を駆け下りて医師の手を引いて家に戻ったが、すでに瞑目していた。その数日前の夜、私の部屋に白緑の蛾が電燈に來たのを追い出したら、翌朝これが門柱の表札にとまって死んでいた。このことは度々記しているのをここにも書く。

最後に父の日常について記したい。

父は酒は家では飲まなかったが、正月用にはベルモットやコニヤックを買って來たので、私は子供時代からその味を知っていた。小鳥をいろいろ飼った。おたまじゃくしを鶏卵の黄身で養ってカエルに育てた。近所の貧しい子供を呼んで、ジャムをぬったパンを与えて楽しんだ。きたない子供や猿回しを家に上げるのを母は嫌がった。

銀座の夜店物と思われる日本画の軸物を買って來たが

それはなかなかの目利きであった。私の為に買ってきた「〇〇齋」とかいふ木版の手本は今も残っている。父は画は描かなかつたが、画の良否はよく分かつた。その訓練と知識をどこで得たのかは分からない。アメリカの万国博の日本出品画の日本での審査員をつとめている記録が残っているという。

私は北大の林学科を希望したが、父は遠く離すのを避け、美校入学をすすめた。父自らが願書を出しに行つたのは、私に養子であるのを見せたくない為らしかつた。学生時代に伊豆で描いた「桑畑」を光風会に出品したのは大正二年二月で、その目録に売価二百円となつてゐるのを見て、父は「なぜ非売にしないか」と私を叱つた。物の売買を卑しく思つてゐた。

大正三年「酒倉」が偶然初期文展に入選した。もし禄祐がいたらどんなに食物・衣服とも趣味を持つていたの上物を用いた。私は父の残した洋服・和服を幾年も着て樂をした

手紙は巻紙を手を持ちながら書いた。字は美しかつたが残つてゐない。硯、その他は母が遣り繰りの為に売つたらしい。写真が珍しいのは、浮浪者の群のように見え

る和服の着流しで、裾をからげたり根棒を担ぐ十人程の写真がある。兎狩りの帰りだと父は言つたが、兎は一羽も無く、当時どこかの学生であつたらう。遺骨は私の放浪の為寺に預け、墓を建てないうちに戦災で寺も骨も消失してしまつた。富士宮大頂寺には先年遠からず私が入る小さな墓がある。そこに父母と戦死した私の長男を寺には記録してある。

禄祐とは関係ないが、私に長崎の下田喜平の子であることになつてゐるので、長崎行きを目的として、昭和十四年秋、友人倉員辰雄と二人で出掛けた。長崎・阿蘇鹿児島を回り、帰途佐伯に数日いた。養賢寺へも行ったが、火災で記録も焼け、変わつてゐるので墓参は不可能らしく、山に向かつて合掌ですませた。この年は父母同行の時と変わらなかつたが、二年目には月本家が十分に移り、ほとんど小策とも会えず、やがて小策は死んだので、これ以来佐伯とは連絡が絶えていた。それにしても山口や月本は懐かしい思い出の中にある。

小野ご夫妻に望まれてこれを記す。